

伊那谷リニアバレーNEWS

～長野県にリニアがやってくる！～

VOL.10 令和6年3月25日発行
 長野県 建設部 リニア整備推進局
 TEL:026-235-7016
 FAX:026-235-7482
 E-MAIL:linear-kyoku@pref.nagano.lg.jp

※今回の伊那谷リニアバレーNEWSは、去る1月31日に実施した「リニア開業を見据えたまちづくり講演会」の様子を、特別ダイジェスト版としてご案内させていただきます。

■令和5年度リニア開業を見据えたまちづくり講演会を開催しました！

1月31日（水）、飯田市エス・バードにて、「リニア開業を見据えたまちづくり講演会」を開催しました。リニア中央新幹線整備を地域振興に活かす伊那谷自治体会議、リニア中央新幹線建設促進長野県協議会、リニア中央新幹線建設促進飯伊地区期成同盟会の共催で「リニア開業に向けた、これからの観光地域づくりについて」をテーマに、沿線住民の皆さまをはじめ、民間企業や、関係自治体など、約130名が参加され、第1部基調講演、第2部パネルディスカッションを行いました。



まず第1部基調講演として、一般社団法人長野県観光機構 専務理事・代表理事の佐藤啓介氏にご講演いただきました。

○佐藤啓介氏

- ・リニアが開業することにより、最も変わることは大都市圏への時間距離が東京まで4時間～5時間のところ、45分に。名古屋まで2時間のところ、27分という劇的な短縮になる。
- ・時間距離短縮に関するピンチの面として、大規模インフラができる際、ストロー現象という大都市に地方の人やモノ、金が流れてしまうことが危惧される。
- ・大都市圏が通勤圏になることにより、リモートワークなど働き方が変化していく中、勤務地と居住地を多様に選択でき、通勤圏の拡大が起こるといったチャンス的一面もある。
- ・観光に関するチャンス的一面として、この地域に東京という巨大マーケットが爆誕するというビジネスチャンスがやってくる。
- ・観光に関するピンチの面として、日帰り旅行が増えることにより、宿泊需要の低下やオーバーツーリズムが起こる可能性がある。
- ・リニアがこの地域に与える影響を考えるのは難しいが、ピンチなのかチャンスなのか一人ひとりが想像し、準備することが重要。



- ・「観光戦略」を考える際、どうやって観光客を呼ぶかというマーケティング戦略よりも、どのような観光地を目指すかという観光地経営戦略が重要。
- ・「観光地経営戦略」とは、地域づくり、すなわち将来この地域をどのような地域にしたいかを念頭に、そのために地域の観光業がどうあるべきかを考える戦略。これまでのように観光客数を増やすことだけを追い求めるのではなく、地域にとって適正なサイズの観光業（観光客数や観光消費額など）を設定し、多過ぎて少な過ぎてダメという感覚で適正サイズを目指すアプローチが重要。
- ・予め、適正サイズが設定されていれば、リニア開業のインパクトに地域が流されずに、自分たちのあるべき姿を追求できるのでは、と考えている。

第2部パネルディスカッションでは、第1部講演者の佐藤氏をコーディネーターとし、上伊那・南信州・木曾地域からそれぞれ1名ずつパネリストが登壇し、リニア開業に向けそれぞれが取り組んでいることや取り組もうとしていることを発表し、後半にて議論を深めました。

○リニア開業に向けてやりたいことや既に準備していることは？

合同会社トビチカンパニー「grav bicycle」共同代表／一般社団法人^{まる}〇と編集社(辰野町)
 理事 小口良平氏^{おくちりょうへい}






- ・一般社団法人^{まる}〇と編集社では、様々な事業に取り組んでいるが、移住の入口は観光からということで、まちづくりを目指して活動している。
- ・長野県でサイクルツーリズムの一環として、約878kmの「ジャパナルプサイクリングプロジェクト」をしており、副代表という立場でルートを決めたり、動線というネットワークを二次交通やリニアなどの結節点とどう結びつけるかを考えたりしている。
- ・下諏訪には甲州街道と中山道の分岐があり、最近インバウンドの方がここを歩くことを楽しみに観光に来ており、そこにサイクリングツアーを落とし込もうとしている。内容として、リニア山梨県駅(仮称)・長野県駅(仮称)・岐阜県駅(仮称)の動線で自転車や車、電車などを使いながら1週間ほどのサイクルツアーをインバウンド向けに作り始めている。
- ・そのルートの1つとして、「初期中山道」という旧中山道ではない、知られざる場所のツアーを始めている。











日本初訪問のG📍ルートは未だ健在。

導線

来訪者の
アクセス方法

-  レンタカー
-  バス
-  ローカル電車
特急
-  リニア
-  飛行機



-  東京↓
-  京都↓
-  高山↓
- or
-  妻籠馬込↓
-  松本↓
-  富士山↓
-  東京

- ・辰野町は観光資源に乏しい町だが、妻籠・馬籠、高山・松本、奈良井宿にきている観光客を、どう引っ張ってくるかということで、自転車の1日の移動距離の60 kmをエリアマーケットとして考えている。
- ・辰野町の魅力を出すには、他の市町村と組む必要がある。例えば松本の城下町と中山道の宿場町はどちらも歩いて回る観光スタイル。そして里山は広大な田んぼをサイクリングして回ることが観光満足度が高いとツアーを通して感じた。そこからサイクリングツアーにはこの3つの要素を入れることで伊那谷、木曾谷、松本から動線を引こうと考えている。

名古屋

↓

松本

↓

伊那谷

↓

中津川

↓

名古屋

東京



AT要素

- ・登山
- ・舟下り
- ・パラ飛行
- ・木登り

移動手段

- ・貸切バス
- ・リニア
- ・自転車

里山文化

- ・農泊
- ・星空
- ・伐倒

・作り始めているツアーの内容として、名古屋にフライトインしてリニアを使い飯田、そして松本から1週間かけてサイクリングツアーをするという内容。そこで伊那谷ブランドを作るにあたり、里山の伐倒文化ということで、チェーンソーを使い木を切り倒してエンターテナーをしている業者と現在商品開発をしている。そして、移動手段が重要と考えており、外国人はサステナブルツーリズムということで、できるだけカーボン

使わない移動をしたいという方が多い。そこでバスや電車などの公共機関を利用することによる商品力のアップが見込める。

- ・様々な地域と連携することにより、面で収益を落とすという考え方をしている。
- ・観光客が増えればマーケットインがそれだけ増えるため、飲食店が増える。そこに移住者も相乗りして来る。そして移住者が増えることにより、教育システムが必要になると考える。リニアでやって来る人は観光だけでなく、その地域にサステナブルに住んでいただくにはどうしていくかという長い時間のかかることだと考えている。
- ・まずは令和6年度にサイクルトレインツアーをこの地でできないか考えている。

コーディネーター 佐藤啓介氏から

- ・「街を楽しむのに最適な速度がある」という新しい発想の中で、小口氏の取り組まれている自転車は街を楽しむ手段である一方で移動手段としても活用できるということで、その辺りで今、リニアに向けて考えていることがあれば教えてほしい。

小口氏

- ・移動速度は大切だと考えている。飯田線などのローカル鉄道はゆっくり走る事を目的に利用される方も多い。一般的なサイクリストは30 km/h だが、一番都合のいい速度は15 km/h であると感じている。なぜなら、私が世界一周を走っているときに、同じ15 km/h の速度で移動していたが、地域の方に声を掛けてもらえる速度だった。これは観光においても大切なことで、伊那谷をツアーで回る時も、バスや電車を活用しながら、あえて見てほしい所は自転車でゆっくり見てもらうことを念頭に置き、何を見てもらうかということを考えている。

日々別荘 店主/ローカルアクティビスト(塩尻市木曾平沢) こんどうさき 近藤沙紀氏

- ・2020年に奈良県から木曾へ移住し、最初は地域おこし協力隊として、築90年の建物をリノベーションし、宿として運営していくという仕事からスタートしている。
- ・木曾平沢にある木曾漆器という産業が30年後も続いていて、居住地として健全に存続していくために何ができるかという観点から、移住・定住、観光や空き家の再生という分野でできることを進めている。
- ・木曾エリアが中山道の整備とともに栄えたこともあり、交通の変化が周辺地域に与える影響は大きい。
- ・移住したばかりの頃、木曾地域の特徴について調べた際、宿場が11あるということは分かったが、その11の宿場の違いについて総合的に分かるサイトにたどり着けなかった。
- ・木曾6町村のサイトには地域ごとの特徴は記載されているが、各宿場間を電車で移動できるのか、歩くことができる距離なのか、観光で訪れた場合に1日で回れる範囲はどこまでなのか、など疑問が溢れたため、実際に各宿場へ足を運んでみると、産業や街並み



も異なり、地域を良くしていきたいと奮闘している人がそれぞれの地域で新しい展開をしていた。

- ・周辺地域住民の木曽地域の解像度が低いということは、観光客にとっても移住者にとっても掴みどころがないということになってしまう。
- ・実際に観光にいられた方から、午前中の早い時間帯に妻籠・馬籠に到着し、2時間観光し、木曽福島に寄って奈良井宿まで来て一泊し、翌朝松本に抜けていく。という話をよく聞き、1日で通過してしまうのは、とてももったいないと感じる。より分かりやすく地域を魅せていく必要がある。
- ・この経緯から、魅力あるものを点ではなく線で繋ぎ、いくつもの宿場で同時多発的にイベントを開催する「木曽路わたし市」という企画を移住3ヶ月目で始めた。
- ・「木曽路わたし市」で出会った木曽中の方と新規事業立ち上げの際互いの応援をしたり、木曽の来訪者を紹介したりなど、地域を面で受け止めることにより、観光客の満足度がより高いものになり、2回目、3回目と訪れてくれるようになった。
- ・現在、まとめて魅力が見えない理由として、行政区が細かく分かれることによるサービスの分断があり、これを解消できる手段がないか考えている。
- ・地域間で送客し合える仕組みや、今木曽で何が起きているのか把握する手段、外国語表記を含む案内の統一など、各地域間で連携を強める大切な期間だと感じている。
- ・市町村という大きな枠組みでなく、区のレベルで自分の地域の情報をきちんと編集し発信することが重要。
- ・木曽谷、伊那谷が広域的に情報を編集するには、最小単位ごとに情報を提出できるよう準備を進めなければならないと考えている。
- ・普遍的な情報はアーカイブしやすいが、新たな挑戦や最近起こった特色ある取組のアーカイブは公募的な機関で取り扱いにくいと感じている。実施団体においても、普段の業務もあるが、情報の可視化を多くの方と接点を持つ機会の前に準備し、地域に興味を持ち、情報にアクセスしたいと願う方々に開示できるようになればと考える。
- ・令和5年4月から自分の地域の情報を可視化させるため、「地域文化編集室」を法人化して、立ち上げた。まず1年かけて様々な情報を整理し、木曽の観光案内所や移住・定住窓口、図書館などへ提供しようと考えている。

コーディネーター 佐藤啓介氏から

- ・サービスの分断や情報の分散など、情報が1箇所に集まらないため地域が分かりにくいということから、「地域文化編集室」を立ち上げたということだが、メンバーはどういった方々か。

近藤氏

- ・現在、木曽谷北部を担当する者と、辰野に拠点を置く者、漆器産業について学びたい学生の5、6人。今後メンバーを増やしていく予定。

株式会社阿智昼神観光局(阿智村) 代表取締役 しらすわゆうじ 白澤裕次氏

- ・先日行った昼神温泉の出湯 50 周年イベントの中で、昼神温泉の 10 年後のビジョンを描いた昼神温泉リニア新時代構想を策定した。
- ・リニア中央新幹線の開通がここ数十年のこの地域唯一のチャンスだと捉えている。今まで何度もチャンスがあつて、それを活かせてきていたらこの状況にはなっていないだろうし、チャンスが無かったからこそ、それを活かす必要があると思う。
- ・星空も、昼神温泉の集客対策の面もあるが、このリニアのチャンスを活かすべく 12 年前から始めた。



- ① 50年前に温泉出湯で歴史的転換を迎えたこと
- ② 50年の歴史の中での温泉街・旅館ホテルとしての課題を抽出すること
- ③ 公営施設の現況と老朽化の対策を考えること
- ④ 50周年の中で阿智村・南信地域にもたらしてきたこと、継続発展させなければならないこと
- ⑤ 50周年の歴史の中で地域の誇りとなり得るコンテンツが誕生したこと
- ⑥ 近くて遠い昼神温泉を近くて居心地の良い温泉郷にすること
- ⑦ 長野県の代表的な温泉郷にすること
- ⑧ リニア中央新幹線、三遠南信自動車が開通する近い将来への変化に対応すること
- ⑨ 国内需要の減少を見据え、世界から選ばれる村、温泉郷を作ること
- ⑩ 環境への配慮と、進む社会インフラや新しい交通網に対応する温泉郷とすること
- ⑪ これからの50年に求められること

昼神温泉リニア新時代構想

- ・昼神温泉は日帰り施設もたくさんあるが、日帰り観光客中心だと経済循環は厳しい状況になる施設が多いため、こういった観光施設を何とか宿泊に繋げ、リニアが開業したときにこのコンテンツをどう活かし、コンテンツを中心にどんな街が出来上がっていくかを 12 年前から逆算し、進んできている。
- ・早めに準備を整え、この南信州が観光のモデル地域となるべく、阿智を中心に取り組んできた。
- ・単発でこの商品をどう売っていくかということではなく、様々な商品がこの地域の滞在を生み、滞在を生むことが商品を生む。
- ・私たちは夜のコンテンツを作っているが、例えば朝のコンテンツや昼のコンテンツを同じ地域内で連携できれば、1泊2日の観光地から、2泊3日、3泊4日と変わっていくのではないかと。

- 外国人観光客はこの南信州地域にはいない。それは単発なコンテンツが多いからであると考えている。

- 長期滞在に耐えうる街を作っていくことが必要であり、その交通インフラの最たるものがリニア中央新幹線であるとする。

- 観光の基本は早く目的地について長く滞在することである。できるだけ早く着

いて、その目的地にコンテンツが多くあれば長く滞在できると私は考える。

- 阿智村にとって昼神温泉はとても重要であり、南信州地域においても観光消費額が年間100億~200億のレベルの観光地であるため、この地域を発展させることが面で繋ぐという意味でも非常に重要である。

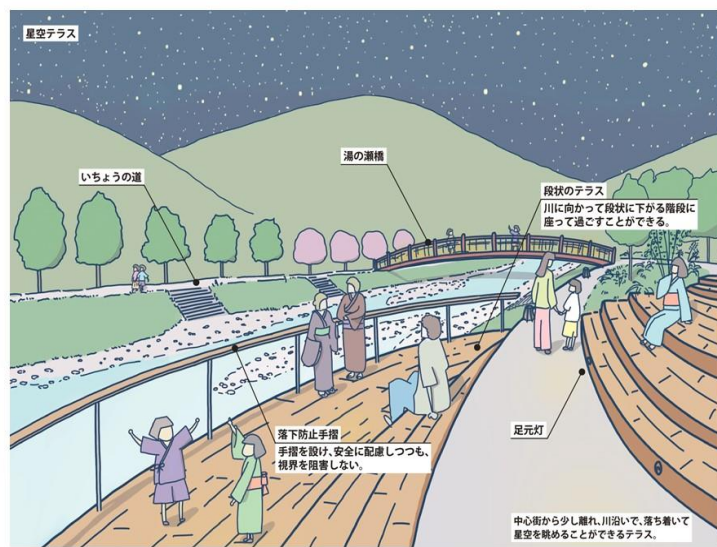
- ユニバーサルツーリズムの観点からも、今まで昼神温泉は車が無いと楽しめない温泉地だったが、体が不自由な方や高齢者、外国人でも楽しめるような、街中を歩ける温泉地にできると、ここへ来る観光客が南信州を堪能でき、宿泊の拠点となる役割を果たすことができる。

- 佐藤氏の講演からストロー現象というピンチの面もあるかもしれないが、これまでにない最大のチャンスがこの地域に来ており、それを活かすべきであるという点。観光地経営戦略においては、観光客が宿泊し、消費し、長く滞在するという街を作っていくという点。この2点に尽きるのではないかと思う。

時代と街づくりに合わせ、来訪者の目的地となる



ブランド「日本一の星空」



世界基準の温泉郷

7つの散策エリア

昼神温泉の各地の特徴を分析することにより、7つのエリアとしてのまとまりが浮かび上がってきました。それぞれのエリアがもつ特徴を活かした、新しい昼神温泉のあり方を提案します。



自然・散策エリア

温泉街を囲む山の中をトレッキングできる、自然豊かな環境の中に身を置けるエリア。

旅館街・散策エリア

趣のある旅館が立ち並び、その間の路地を散策し温泉街の風情を楽しめるエリア。

憩いエリア

建物が低密度で緑も多い、広がりやゆとりのあるエリア。

にぎわいエリア

温泉街の中心に位置し、飲食店・ショップ・観光案内所などが立ち並びます。温泉街の顔ともなるにぎわいを創出するエリア。

川沿いプロムナードエリア

温泉街の中心を流れる阿智川沿いにプロムナードを整備し、まち歩きやそぞろ歩きを誘引するエリア。様々なアクティビティの拠り所となります。

文化・スポーツエリア

温泉街の北西に位置し、文化施設やスポーツ施設などが設けられる、まち歩きの目的地となるエリア。

遊び・体験エリア

どろんこパーク・グランピング施設・レストランなど、子連れのファミリーなどを中心に、遊んだり、昼神地域の豊かな環境を楽しめたりするエリア。

そして世界のHIRUGAMIへ

阿智村は「日本一の星空」の村として認知されるようになってきました。ここから発展して、昼神温泉は世界に広く認知され、誰もが訪れたいと思う世界水準の温泉まちを目指します。その一環として、国連世界観光機関が形成する「持続可能な観光地づくり国際ネットワーク(INSTO)」加入を目指していきます。

2023年11月23日 初版第1版発行

発行者 阿智村役場

監修 昼神温泉リニア新時代戦略等推進委員会

制作 株式会社JTB総合研究所

デザイン 米澤隆建築設計事務所+大同大学米澤隆研究室+天野百花

コーディネーター 佐藤啓介氏から

- ・リニアの開業時期が不明確なところがあるが、開業時期から逆算して2024年現在は「もう2024年」なのか、「まだ2024年」なのかどちらか。

白澤氏

- ・もう遅い。12年前からこのコンセプトで進めてきて、まちづくりの構想に時間を要した。このプランは住民の方や様々な方の最終的なコンセンサスを得ているのではなく、こういう街にすればリニア開業の新時代に対応できるというところで策定している。そういった意味では時間が足りなかったという想いもあり、もっと早い段階でこの構想を発表して、基本設計からその先のことも進めなければいけなかったと感じている。

佐藤氏

- ・リニア開業はまだまだ先だと人によって考えるかもしれないが、このような大きな構想を構えてしっかりと準備していこうとすると時間が足りないという感覚を持っていることは、リニア開業に向けてのタイムスケジュールという点で、非常に参考になる話だった。

○リニア開業はピンチであるか、チャンスであるか、どう捉えている？

佐藤氏

- ・白澤氏は先程の話の中でチャンスであると言っていたが、他の二人はどう捉えているか。

小口氏

- ・チャンスである。理由として、この地域ではないところで実際にハードインフラができた時の効果を見ているから。例えば出身地域の諏訪で言うと、諏訪湖のサイクリング口

ードを作った。その結果、サイクリングをする方が体感で2倍強ほどになり、行政が入ってくれて、民間事業者がレンタルサイクルや観光客を迎え入れる投資を行った。そして2025年夏、諏訪湖スマートインターチェンジの完成に向け、今度は民間側からの投資が始まっており、スパイラルの向上化が進んでいる。



他の地域を挙げると、飯山で新幹線が開通したことにより、アクティビティセンターができた。その結果、地域が盛り上がり、最近では道の駅に mont-bell が入ったり、リモートワークの方が移住し、その奥さん方がカフェの経営やお店を持ったり、移住者が増えたことにより、教育機関が充実したりといった好循環が起きている。これはリニアにも同じようなことが言える。

観光の面で言うと、インバウンドの方々が増えてくるので、私は好機と捉えている。

近藤氏

- ・ピンチである。木曾中の方々がここで連携できるのか、どれだけの人が危機感や期待を持っているのかを考えるとピンチかもしれない。このような機会を通じて、もっと横の連携を強くしていかなければいけない。

佐藤氏

- ・今、このパネリスト中でもチャンス2名、ピンチ1名と捉え方が変わる。皆さんそれぞれの考え方がある中で様々な情報を集めながらチャンスなのかピンチなのか、そのために何をすべきなのかを考え、行動を起こしていくことがこの地域のリニア開業をより良い形で迎えるために必要なことかと思う。

○やりたいことや準備していることを実現するために、必要なサポートは？

小口氏

- ・先程の私の説明にて、山梨県駅(仮称)・長野県駅(仮称)・岐阜県駅(仮称)とかなり広域的な捉え方をしているため、行政や民間の横連携を強めてほしい。そして、民間側の目線で言うと、私はまだ、プレイヤーと繋がれていないので、行政



にプレイヤーの場を提供してほしい。現在私は業者とツアーを少人数で行っているが、これを不特定多数がフリーランスで走れるようなサイクリング環境を作るためには行政の方と民間のプレイヤーの数を増やしていきたいと思っている。

佐藤氏

- ・隣県駅を繋ぐというのは、民間だけだと難しい。距離が遠ければ遠いほど、その間をどのようなインフラで繋ぐのかということが求められるため、隣県同士の連携を県を中心に行政にサポートしてほしい。そして、同じ志を持ったプレイヤーが集まれる場所ということで、現在民間でもそういったネットワーキングのイベントをやってはいるが、その地域にどういった方がいて、どのような活動をされているかという情報は地元行政が多くストックしているため、ネットワーキングの場の提供に期待したい。

近藤氏

- ・他地域と連携を図る前にまずは木曽地域内で地域間連携を図りたい。木曽郡全体の情報の集約は木曽広域連合などが努力していることは耳にしているが、木曽平沢や奈良井宿は塩尻市になり広域地区的には松本地域に入るので、情報が若干取りづらい部分がある。その辺りが解消され、情報の集約や周遊が見込まれると、木曽の南部、中部、北部で1泊ずつできる見せ方ができるようになる。

佐藤氏

- ・情報の収集について、先ほど話のあった「地域文化編集室」は集めた情報をいかに編集して良く魅せていくかということとと思っている。近藤氏は奈良県出身でいわゆる“よそ者”である。地元出身の方はその地域の良さが日常化しているため魅力に気づいていたとしても、その魅力を外に伝えることに苦戦するというをよく聞く。その場合近藤さんのような方に地域の良さ（素材）を提供し、編集（料理）してもらうことによって、地域の魅力を外の方へ、より伝わりやすい方法で伝わるのではないかと期待している。

佐藤氏

- ・もう一つ、近藤氏から事前の打合せの際に聞いた話だが、木曽地域は外国人観光客が増えていて、もしかすると木曽の良さは日本人よりも外国人の方が価値を高く評価してくれるのではないかと、という話を伺った。外国人観光客により一層来ていただくために地域として取り組まなければならないことはあるか。

近藤氏

- ・外国語表記についてもそうだが、周遊の仕組みが分かりづらいという話をよく聞く。今私が営業している短期宿泊施設の日々別荘では、海外向けの広報宣伝を全く行っていなかったが、2023年度の利用者の8割が欧米系の外国人観光客であった。その方々に到着前にコミュニケーションを交わすと、どこの駅で降りたら良いのか、ワンマン電車の乗り方、地元のルールなどの情報をどこから取得したらいいかわからないという話をよく聞く。そういった情報を統一的にまとめたものを駅やマップに整備できると、観光客の満足度も変わるのではないかと。

佐藤氏

- ・地域として受け入れ環境を統一的に整備することが重要である。

白澤氏

- ・それぞれの地域がそれぞれの持っているアイデンティティを磨き上げることが必要。例えば阿智村は宿泊で3,000泊の温泉郷があるが、他の地域も宿泊をやるわけにはいかない。阿智は宿泊をやる。飯田は〇〇をやる。木曽は△△をやる、辰野は□□をやる。というそれぞれの地域の良さをリニア開業するまでに徹底的に磨き上げ、情報発信力を含

めて高めることにより、周遊観光が容易になり、プランが立てやすくなる。それぞれの地域の特色を生かした、広域的な観光圏の作り方が必要だと考える。

昼神温泉リニア新時代構想そのものが実現できるかはこれからだが、実現するには多額の総工費がかかる。世界中から観光客を昼神や伊那谷・木曽谷に呼び込むためには、それなりの予算規模を投下しなければならない。そうすると、一つの自治体の予算規模で実現可能なのかということもある。多くの観光客を呼び込めるチャンスがあり、地域が周遊として連携できれば、この構想を多くの自治体へ共有いただき、それぞれの自治体でどんなことができるのかという議論ができれば、実現もより早まるのではないかと思う。この構想は民間企業や投資家の方々にも話す機会が多くあるが、積極的に企業の参入や投資をお願いするといったサポートを、県やそれぞれの自治体の皆さんにもぜひ取り組んでいただき、情報発信をしていただきたい。

最後に観光機構にお願いだが、先ほど情報の一元化という問題もあり、阿智でもプロモーション会議を行っているが、これを取りまとめて、大きなプロモーションとして観光機構や県が担う、といったことができればマスメディアを使った、直接マーケットへ届けられるような情報発信が可能になる。

佐藤氏

- ・1点目として、各地域が周遊観光に向けアイデンティティを磨き上げることが必要だと話があったが、小口氏の話にもあった、隣県駅との連携をリニアのルートとして売り込んでいく、ということがよく議論に上がるが、固定的なルートありきで周遊観光を促そうとしてもなかなか厳しい。人が行ってみたいと思える点が無ければ、ルートだけ成立させても観光客は来ない。そこで、地域単位や事業者単位でアイデンティティをたくさん作り、磨くことが大切である。

阿智村は元々星空という概念がないところからアイデンティティを作った白澤氏の経験として、これから地域でアイデンティティを磨き上げていくために、何をポイントとして抑えていけばよいか。

白澤氏

- ・私の考え方だが、昼神温泉や阿智の星空は「宿泊」が1つのアイデンティティになる。それ以外に旅に必要なものは「食」「遊び」「文化」の合計4つある。昼神に泊まり、食が一番いい場所に行く。文化が素晴らしい場所へ行く。そしてサイクリングのようなアクティビティのある所へ行く。この4つのコンテンツがあるだけで3泊4日の旅が出来上がる。この4つをそれぞれの地域が磨き上げていければ世界中の観光客が楽しめる観光地エリアができると考える。

佐藤氏

- ・今の4つのポイントを全て1つの地域が担うのではなく、昼神温泉は宿泊があり、この地域は美味しい食べ物がある。といったそれぞれの地域が強みを活かしていくことが重要である。

○フリートーク

小口氏

- ・良い意味でこの狭い伊那谷・木曽谷で同じことをやるのではなく、みんなでそれぞれの特徴を生かすことが大事だと再確認した。外国人観光客も1週間ほど日本に旅行に来る

が、毎日日本食ばかりでは飽きてしまうため、たまには地元の料理を挟むことも必要だという話をよく聞く。例えば古民家ばかりの宿泊施設だと違うところに泊まりたいとなる。辰野町にはいい宿泊地はないから、昼神温泉を勧めて、その代わり里山文化を楽しめるアクティビティがあるといった地域間の連携が無いと、世界に選ばれる観光地にならないと実感した。これを機にこの講演に来た方々とも繋がりたいと思う。

近藤氏

- ・ 1 地域プレイヤーは地域の枠を越えた話をさせていただくのは1年の中でも多くない。こういう機会に呼んでいただき、地域として磨き上げなければならない部分、それを越えて戦略的に考えなければならない部分の2本の柱が継続的に進化して検討されていくことに期待とワクワクを感じている。地域のプレイヤーにもこういうワクワクを共有出来たらと思うし、Iターンで来ている方は、自分たちの故郷以上にその地が好きで来ているため、このような期待感も共有できればと思う。

白澤氏

- ・ このチャンスを活かさないと、この地域は今後どうなっていくのかという不安がある。このチャンスをしっかり活かして、次の世代へ残す役目が我々にあると感じているので、早めの実現をお願いすることと、旅は早く着いて長く滞在することが基本であり、そこでその地域の方との触れ合いも生まれ、文化を知ることでもでき、地域を周遊することができるため、リニア中央新幹線が開業することを皆さんが、ぜひチャンスと捉えていただき取り組んでいただきたい。

地域を連携していくというチープな言葉ではなく、南信州や、木曽、上伊那を含め全体で行政の垣根を取っ払って、大きな観光圏というダイナミックな方針転換を世界に向けて発信していくというレベルで語っていくべきではないかと思う。この地域がしっかりとエリア形成が図れば、より情報発信力も強まり、情報の価値も高まるので、皆さんとそのような想いを共有し、観光エリアを作っていけるような動きが始まればと思う。

○結びにあたり佐藤氏から

- ・ リニアというこの地に訪れる大きなインパクトは、果たしてピンチなのかチャンスなのかを一人ひとりが考えていただきたい。
- ・ 時間軸で考えた時に現在は、リニア開業はまだまだ先だ、という考えではなく、もう間もなく開業するという捉え方が必要である。
- ・ パネリスト3名の共通項だが、市町村の中での取組ではなく、そういったものを越えた外との繋がりや、民間と行政というセクターを越えて連携していく必要がある。そのために役割分担の問題が出てくるが、人手不足ということもあり、プレイヤーが十分な経営指揮権を持ってない時代になっているため、やれる人がやるという発想は大事だと思う。

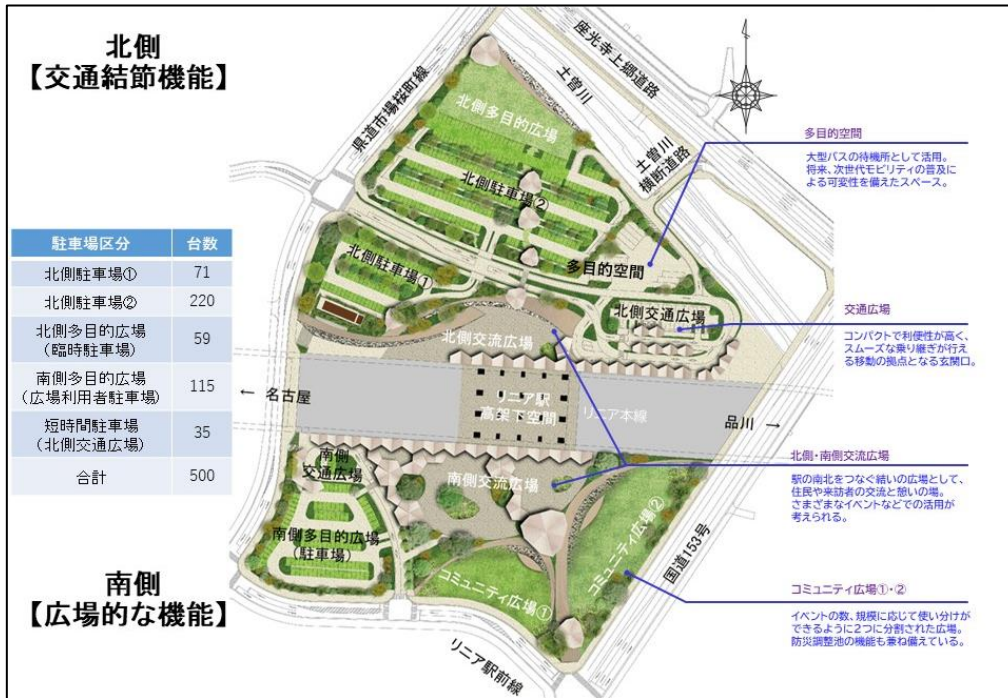


飯田市からの状況・経過説明

講演会の冒頭、飯田市リニア推進部より、長野県駅(仮称)の周辺整備状況や、アクセス・駅前広場活用検討会議について説明がありました。

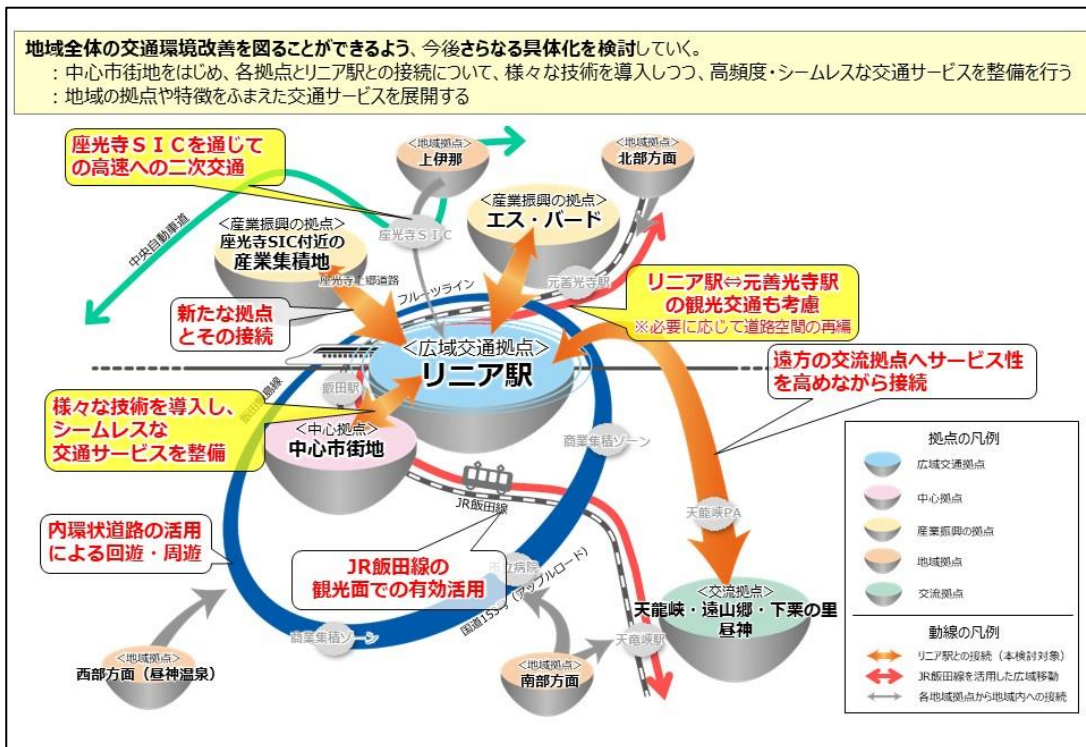
○飯田市リニア推進部 牧島光宏参事

- ・リニア長野県駅(仮称)駅前広場空間の平面図



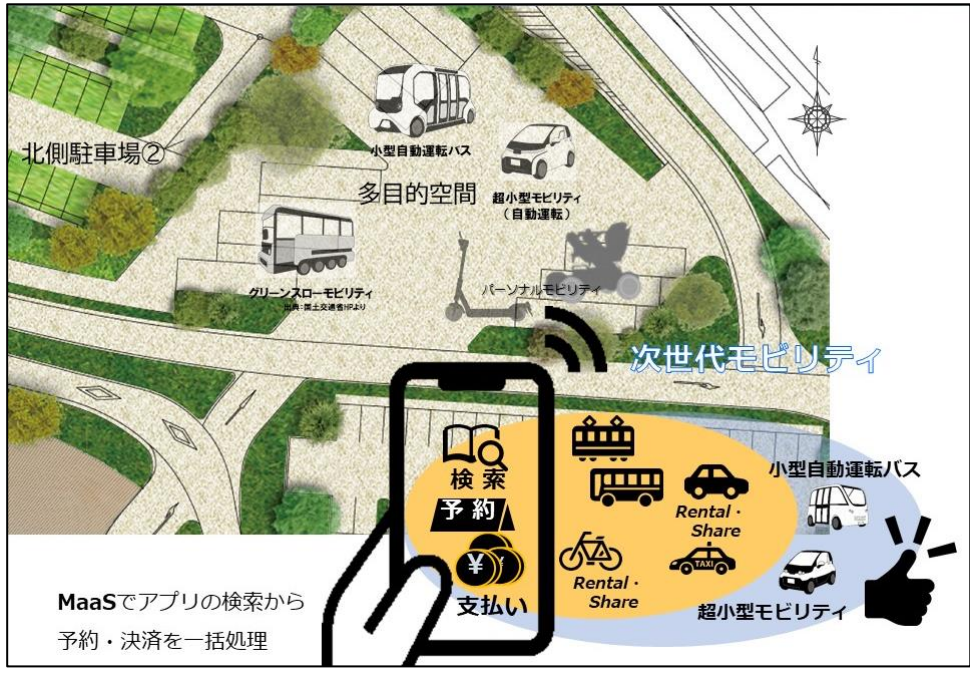
図面中央、灰色の部分がりニア本線で、北側に交通結節機能を、南側に広場を配置し、駐車場や広場は緑の多い落ち着いた空間としている。限られたエリアとなるため、駅としての機能的な部分が多く占めている。なお、建物の建設については、今後進めていく。

・リニア駅からの二次交通の検討



リニア駅とJR飯田線既存駅との接続や、各地域の拠点を結ぶ動線、往来する利用者像などから、移動において重視する機能を想定した検討を行っていく必要がある。

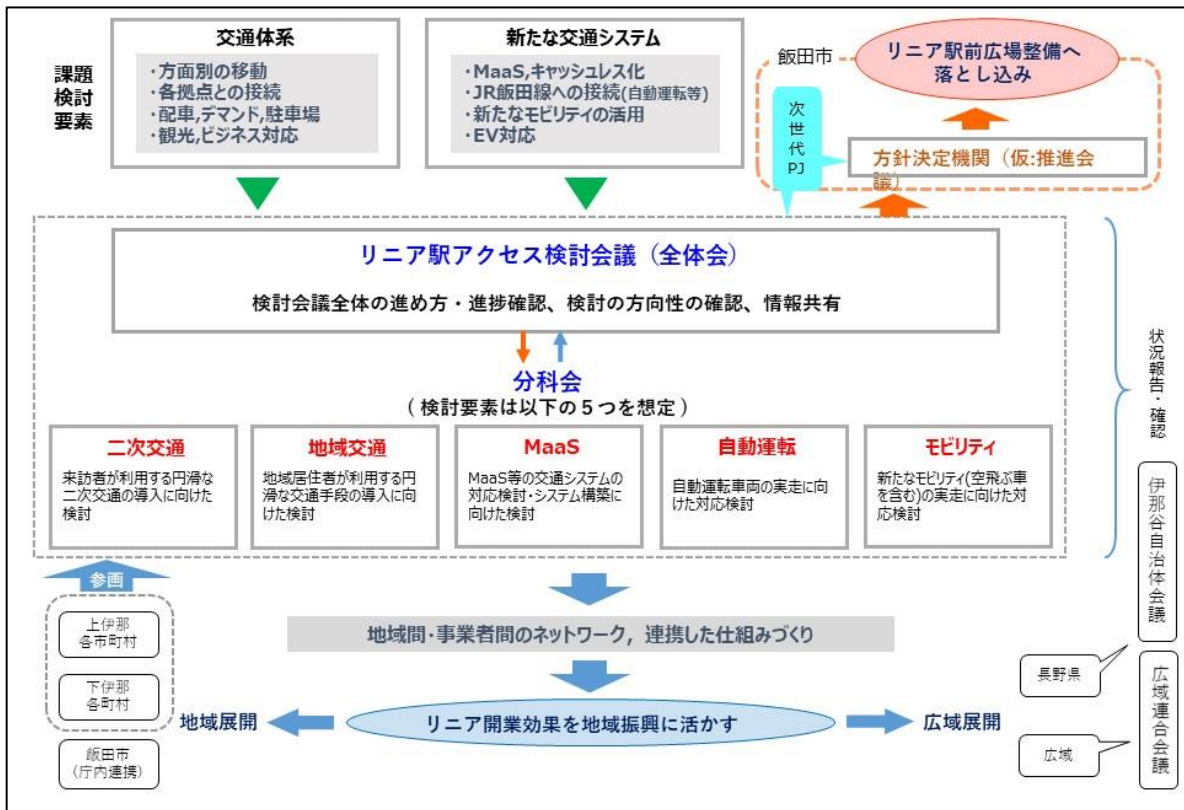
・新たなモビリティの導入や MaaS の活用



新たなモビリティの将来的な導入や、地域課題とも連携した MaaS システムなど、シームレスな交通サービスを提供できる整備を目指すとともに地域の拠点や特徴を踏まえた、地域全体の交通環境の改善を図ることができる検討も必要。

このため、これまで広域や各自治体で進めてきている交通関係の検討に加え、リニア中央新幹線の整備効果を広域的に波及させていくため、「リニア駅アクセス検討会議」を立ち上げた。

・リニア駅アクセス検討会議の概要について



リニア駅からの広域的な二次交通や地域交通体系との接続、技術開発が進む自動運転や新たなモビリティ、MaaS 等も含めた交通システムなどについて、全体会や5つの分科会で情報共有を行い、アクセスの検討を行っていくこととしている。

・交流広場、コミュニティ広場の賑わい創出

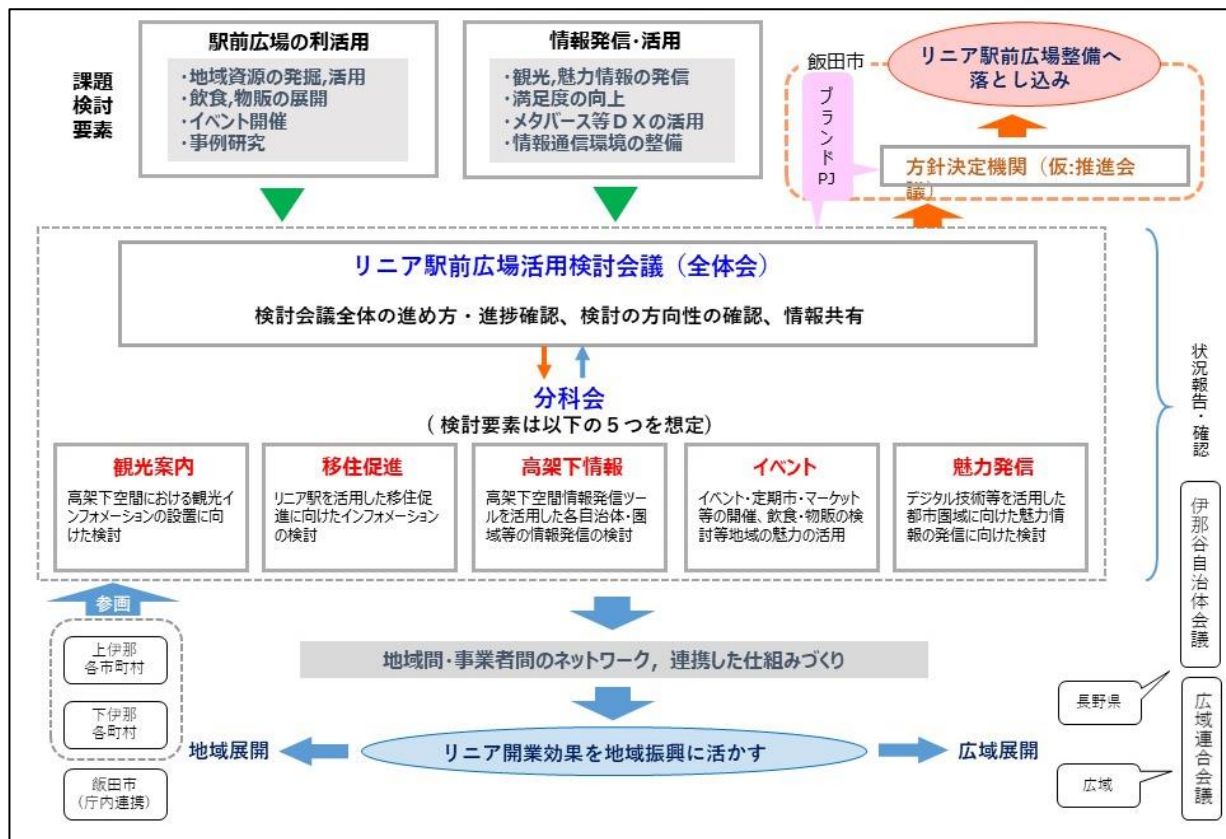


駅前広場を活用し、リニア中央新幹線の利用者との交流の場として、様々な地域の魅力を伝えるイベントや、高架下空間での情報提供を行い、賑わいを創出するとともに、各地域へいざなうきっかけを作る必要がある。

「リニア駅アクセス検討会議」同様、それぞれの地域が持つ魅力

を、駅においてどう大都市圏域や海外に向けて発信していくかを検討していくため「リニア駅前広場活用検討会議」を立ち上げた。

・リニア駅前広場活用検討会議の概要について



「リニア駅前広場活用検討会議」では、特産品や食、文化など、地域が持つ様々な地域資源を活用し、高架下空間・交流広場での店舗やイベントへの展開、観光や体験等を通じた交流人口の拡大、大都市圏域やインバウンドへの継続的な情報発信などについて、全体会や5つの分科会で情報共有を行い、駅前広場活用の検討を行っていく。

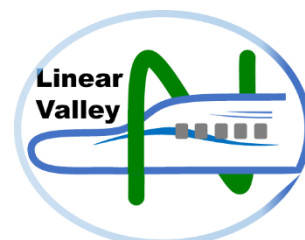
「リニア駅アクセス検討会議」と、「リニア駅前広場活用検討会議」の2つの会議は、長野県と共同で開催し、伊那谷の自治体や関係団体にも参画いただき、令和7年度を目途に検討を進めていく予定。

講演会の内容について、3月中にYouTubeにてアーカイブ配信を行いますので、以下のURLより、チェックしてください！

URL: <https://www.youtube.com/channel/UCpJdDdDcLvjGktKiuAn8dlw>

県リニア整備推進局では、リニア中央新幹線開業に向け、気運の醸成を図るため、資料などへ使用できる右のロゴマークを使用しております。

今後、資料に貼付するなど積極的に使用していくほか、伊那谷リニアバレーNEWSを読まれる皆様にも、使用していただきたいと思います。利用をご希望の場合、担当までご連絡ください。(連絡先:026-235-7016)



©長野県